

高山

たかやま
高山の原生林を守る会

会報 第 124 号
2023年 3月



第 186 回観察会 十万劫山自然林の冬芽観察会

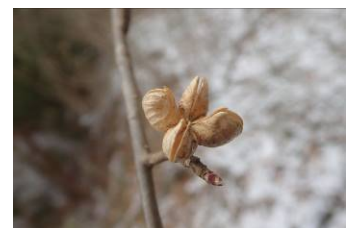
2月26日(日)に福島市渡利地区に位置する十万劫山で観察会を実施しました。参加者は17名でした。今回の山頂までのコースは、一般的な登山ガイドには載っていない廃道化された尾根道を辿るルートです。このルートは藪漕ぎ好みのマニアックな登山者しか利用されていませんでしたが、最近、地元に住む「福島県もりの案内人」の方が、仲間と協力して再整備されました。

花見山駐車場からくるみ沢に向かいます。くるみ沢の入り口ではケヤキとヤマグリの見事なアガリコが残っており、十万劫が古くから利用されてきた里山であることが分かります。くるみ沢砂防堰堤から庭園の様な植林地を抜け、センダンの木を過ぎると自然林の山道となります。やや湿った平坦地では果実を飛ばした後の袋果のさやを残すコクサギが見られました。

やがて谷は深まり、葉を落とさないヤマコウバシやチドリキを観察、ケヤキのアガリコが見られる急斜面を登り切って、本日の観察会の主役ケヤキの巨大なアガリコに辿り着きました。幹の数を数えると8本あり、さながらタコの様相です。しばし鑑賞した後、イヌブナやクヌギの大木が林立する急こう配を登り、ササに覆われた平坦な小径を辿ると山頂に飛び出しました。山頂で休憩していた登山者を驚かせたようです。山頂から少し下ったところで昼食。冬芽を観察しながら花見山を経由して下山しました。観察ポイントが多く、見どころ満載の観察会でした。



見事なヤマグリのアガリコ



コクサギ



ヤマコウバシ



何かありました？



登り起点のアガリコ

第 186 回 十万劫山 自然林の冬芽観察会の記録

丸山吉子



タコケヤキ大王の前で

会員の皆様初めまして。今回ご縁あって、初めて参加させていただきました。わたしは、十万劫のふもとで生まれ育ちました。集合場所の花見山大駐車場は、通い慣れた実家への通り道です。観察会が自分の生まれた故郷の山だなんて、何て素敵なことでしょう！

夜半から降った雪がサラッと積もり、空気がキリリと気持ちのいい朝でした。初参加のワクワクと緊張の中、美しいカラー刷りの“しおり”を手にいざ観察会に出発です。「クヌギと山栗の森・十万劫はかつての趣を残した森」との言葉に、ふる里を褒められたようなほっこりした気分になりました。

くろみ沢に向けて歩き出してすぐに観察ポイント！《萌芽更新》《中間芽》《母岩》次々に初めて聞く用語です。ヤマコウバシが葉を落とさない(落とせない)理由や、植物の特性の説明を聞きながら、それって……「人間の世界にもあるよねえ」「あるある」と、話しもはずみ笑みもこぼれます。一番の難所、尾根までの急登では、代表の佐藤さんがロープを設置して安全を確保してくださいました。登りきった所に、本日の観察の主役『あがりこ大王』が、皆の到着を待っていました。どっしりとした幹から8本の枝を広げた堂々たる姿です。かつて切られた枝に空いた洞に手を突っ込んでみたり、枝(足)の数を幾度も数えてみたり、しばし観察です。この山の主は、この先もまだまだ生き続けることでしょう。

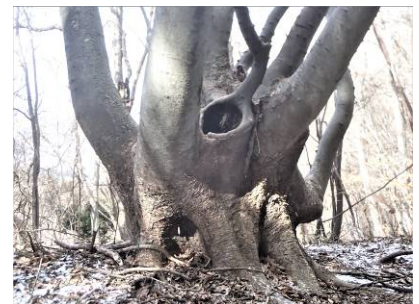
尾根道を登りつめて笹藪を進むと、突然！風神・雷神を祀った祠がある山頂にでました。出た私もビックリ！でしたが、先に山頂にいた方々は藪の中から続々現れた私たちに、ビックリ！の様子でした。お待ちかねのランチタイムは、風のあたらない頂上から少し下がった所でいただきました。帰路では冬芽や樹皮の様子を観察。ヤマボウシ・イヌザンショウ・エゴノキ・アオダモ・ミズキ・ウリハダカエデ等々たくさん教えていただきました。中でも、犬山椒のトゲトゲは印象的でした。下山は『しのぶの細道』を花見山方面にたどり、残り咲きの“十月桜”越しに十万劫の姿を確認しつつ駐車場へ戻りました。もうすぐ花見山は春色に包まれ『桃源郷』となり、多くのお客様を迎えることでしょう。今日この静寂の中、芽吹きに備えた冬芽の観察ができたこと、たくさんの興味深いお話が聞けたこと、参加させていただけたことに感謝です。佐藤さん、奥田さん、役員の皆様ありがとうございました。



舗装道わきには見事なクヌギ



急登を登って



タコケヤキ大王



ヤマボウシの冬芽



ナラガシワの樹皮



このイナゴの事情を



皆であれこれ

十万劫山の山頂標識

野中文字子



2月5日 十万劫に新しい山名板が設置されました。制作者は渡利在住の本多正明さん。「福島県もりの案内人」として、地元学習センター主催の「十万劫登山」スタッフを務めたり、頻繁に登って道を整備したりされています。手彫りのスッキリした山名板が、三角点や雷神様の社と並び、山頂、整いました。

小鳥の森の観察（冬） 山野草の花の果実 松井さき子

毎月1～2回半日で花友（松井さき子、渡辺京子、五十嵐礼子、古内真由美）の2～4人で小鳥の森を散策、観察をして3年目になる。勿論、確認された小鳥、昆虫、草木の花と果実等は写真に収めている。

今年1月早々、道には雪は無く暖かい日に散策した。道の両側にはセンボンヤリ、オケラ、ナガバノコウヤボウキ、ツクバネの果実（そう果）。また、11月頃、野草の中で最後に咲く、小さな白い花のキッコウハグマも花径を伸ばして果実を着けて、日の光を浴びてキラキラしていた。緑色の葉を残しているシュンランは、めったに見られない果実を着けていた。今年はいたる所で見かけており、なぜ多くの株で果実を着けたのかわからない。調べてみたら、その果実のことを蒴果（さくか）という事が分かった。

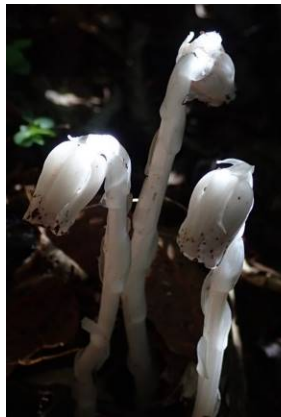
2月の観察でも変わった蒴果が見つかった。黒く細く5～6果の花が咲いたように枝分かれしていて、緑色の葉は無かった。調べてみるとムヨウランの蒴果と分かった。私たちはムヨウランの花は見たことが無いので、初夏の観察が楽しみであり、見つかるまで探したい。また、以前に小鳥の森で見かけたことのあるアキノギンリョウソウの蒴果を別の場所で見ることができた。その蒴果を見たのも初めてだった。

色々な花の果実は着き方や状態によって違い、そう果、蒴果、液果、袋果等があることが分かり、この機会に学習できてよかった。



シュンラン

今まで、度々、花を見ていたスマレ、カタクリ、ヤマユリ、ウバユリ、イチヤクソウ、ウメガサソウの蒴果は見慣れてはいるが、今回、見つけた蒴果との出会いにワクワク、ドキドキ。花の咲く時期は勿論、花の咲かない時期でも新しい発見があり、興味深く、楽しみになった。



アキノギンリョウソウ



ムヨウラン



山のエッセイ 14

五島列島の旅

長岡義人

私には行きたいという言葉の前に「どうしても」という一言を添えたい程の憧れの地があったのだが、人生制限時間いっぱいもう行けないだろうと思っていた。だがある時、気になる見出しの旅行チラシが目にとまった「山の緑と潮の香に、五島キリシタン四百五十年の祈りがきこえる・・・」この謳い文句に私は誘われてしまった。遠藤周作は小説「沈黙」の中で、秀吉の時代に始まった切支丹禁制令で棄教を迫られ、迫害を受けた信者たちの受難に神は何故沈黙したのかと問うている。そんな歴史秘話を多く遺す五島列島の天主堂がライトアップされ、教会クリスマスコンサートが開催されるという。

福岡空港を離陸して45分飛行機は五島福江空港に着陸した。念願の島逸る心でタラップを降り、速足でランウェイを歩き空港の建物を抜けて、レンタカーの待つ駐車場に着くと、二人連れの女性から「長岡さんですか？」と声を掛けられ「そうです」と返事をする。「お荷物は？」と訝しげな顔で聞かれた。私と妻は顔を見合わせ「いけねえ、忘れてきた！」と言って、慌てて空港に戻ろうとすると、島の観光課の職員そのふたりは「羽田で預けたんですか？」と問うてから「大丈夫、慌てなくても今頃手荷物受取り所のターンテーブルでぐるぐる廻っていますよ」と笑いを堪えながら言った。空港へ戻ると成程わが荷物が廻っている。空港職員は乗客皆が済むまで空港には入れないこちらは笑いながら言う。では待っている間にと、先程の二人がいろいろと島の説明をしてくれた。今（2015年）五島は世界遺産登録をめざして観光を盛り上げようと頑張っているとのこと、車はEV車で島のいたる所にある充電場所の地図や、島の各商店で使えるクーポン券二人分（結構な額だった）



気になる見出しの旅行チラシが目にと



大瀬崎灯台

を観光案内地図と一緒に渡してくれた。

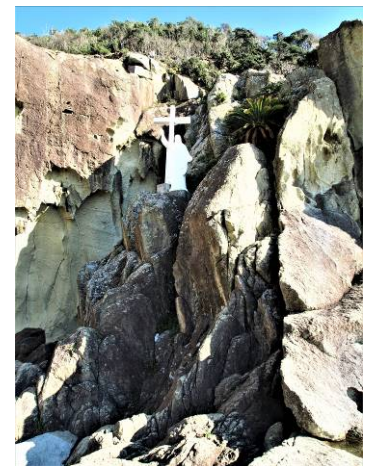
五島列島は長崎市の西の海上約百キロの東シナ海に浮かぶ152の島々からなり、島内には50もの教会がある。この旅ではEV車と船でその中の10の教会と、海山の自然や歴史の街とを巡った。その他行けなかった教会や名所旧跡にも感動の歴史秘話が沢山あるという。まずは空港を出て途中何ヶ所かの教会の寄り道見学をして、福江島の最西端にある大瀬崎灯台に行った。岬に到着して森の中の緑のトンネルの遊歩道を行くと展望台に着く。誰もいない独り占めのここからの眺めは圧巻で、雄大に広がる東シナ海に突き出た断崖絶壁の上に、青い海と空とを背景にして白い灯台がすっと屹立していた。行けなかったが灯台までは往復1時間の距離である。



頭ヶ島教会

次に訪ねたのはこの旅のハイライト頭ヶ島教会。近世切支丹弾圧を逃れて役人の目の届かぬこの地へ移り住んだ信者らが、浄財を捧げ労力奉仕をして自分たちの信仰の家としてこの教会を築いた。そしてその祈りは今も大切に守られ続けている。中通島の真っ暗な山間を車で駆け、橋を渡り小さな湾の一角に出ると、そこに山の緑に包まれて、集落の港を見守るように建ち「花の聖堂」と呼ばれる椿の装飾の美しい頭ヶ島天主堂が、ライトアップされて幻想的に目の前に現れた。それは信者たちによって切り出された石を積んだ外壁と、窓のステンドグラスが堂内からの温かい灯りに照らされて、対称的な重厚さと繊細さとが調和して、暗い夜の世界に浮かび上がっていた。聖堂内ではストーブが赤々と燃え満員の聴衆が見守る中、バイオリン・ピアノ・フルートの演奏とアルトの歌声が奏でる讃美歌が堂内に響く聖夜を祝うコンサートが始まった。

翌日は穏やかな海を船で切支丹洞窟へ、ここは過酷な迫害から逃れるために、三家族十三人の信者たちが密かに隠れ住んだ所で船でしか行くことが出来ない。船を岩場に接岸させて、揺れる舳先からおっかなびっくり下船して、洞窟の入口で写真を撮って戻ろうとすると、船を沖で待機させていた船長さんが、もっと洞窟の奥まで見学できると大声で教えてくれた。そこは海からは見えない格好の隠れ場となっていたが、彼らはたった4か月しか暮すことが出来なかった。朝食を炊く煙が沖の漁船に見つかり捕らえられ、過酷な拷問をうけるという悲劇の舞台となった所である。今その場所には鎮魂の思いを込めた十字架とキリスト像が建てられている。船で次に向かったのは久賀島にある旧五輪教会、ここも船で行くか歩いて行くしかない。海から眺めた旧五輪教会は一見古い和風建築のように見え、玄関に掲げられた「天主堂」の文字は摩滅して今にも消えてしまいそうだ。



切支丹洞窟

廃堂となって約30年、そこは信徒たちの祈り場ではなくなっていた。堂内は意外に広く板張りの天井が高く、正面にある祭壇が見上げるような位置に清廉なる品格を持って残されていた。アーチ型の窓の向こうには海と港が見えその昔祈りの時を過ごす信者たちが、三々五々船を漕いで教会に集る姿が偲ばれた。この教会は昭和6年に他の集落から現在地に移され、五輪地区の信徒たちの天主堂として使われてきたが、昭和60年新教会が完成すると、役目を終えた旧教会に解体の話が持ち上がったのだが、寸前にこの建物の文化的価値を知る一人の人の訴えにより保存が決定されたという。その後は1999年に国の重要文化財に、そして今世界遺産に選定されたことを思えば、自然や文化の真の価値を見極める目を持つことの、大切さを思わずにはいられない。

旅の終わりはフェリーで長崎市に渡り、小説沈黙の舞台、外海の教会と遠藤周作文学館を訪ねて三泊四日の旅を締め括った。

東北ブナ紀行（84）

奥田 博

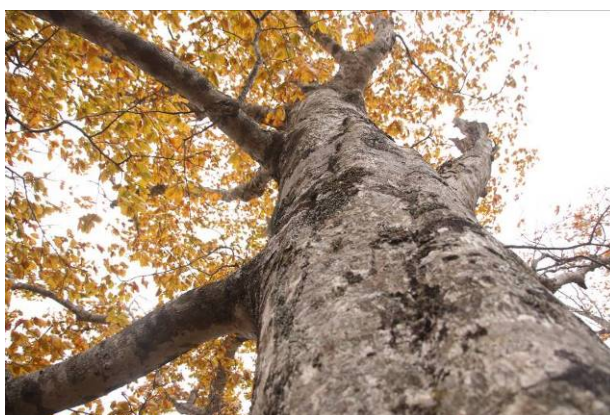
昨年の秋に岩手県の海岸に近い場所の千^〇程度の山々を訪れ、二つの山で立派なブナに出会った。どちらも無名な山だが、立派なブナ林は多く残されていた。

133) 犬頭山 852m

岩手県は広い。この山は釜石中央 IC から北西に戻るように小川川に沿って登山口へと向かう。犬頭山と反対方向の西に仙磐山（1015）に登る登山者は多く、道標は仙磐山を示している。沢に沿った単調な道から、次第に急なジグザグに切られた道に差し掛かる。やっとのことで、峠状の

ここからは今までに比べれば穏やかな登り。そして尾根筋では見事なブナ林が広がっている。コルから標高差百^〇を登っただけで、紅葉は次第に葉を落としていった。そんな変化を楽しみながら登れば山頂到着となった。

コースタイム：登山口（1時間30分）コル（50分）山頂（1時間30分）登山口



紅葉も後半に入って、疎らな葉が秋を感じさせる

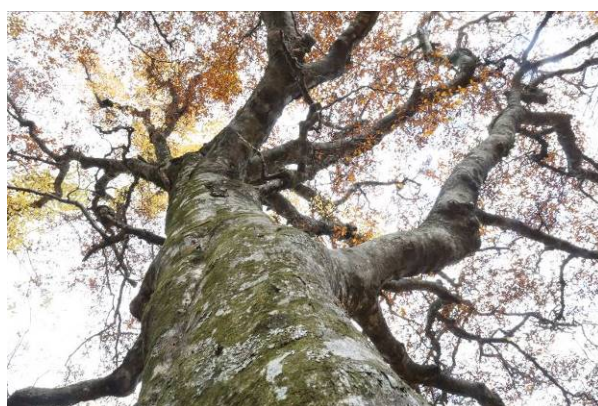
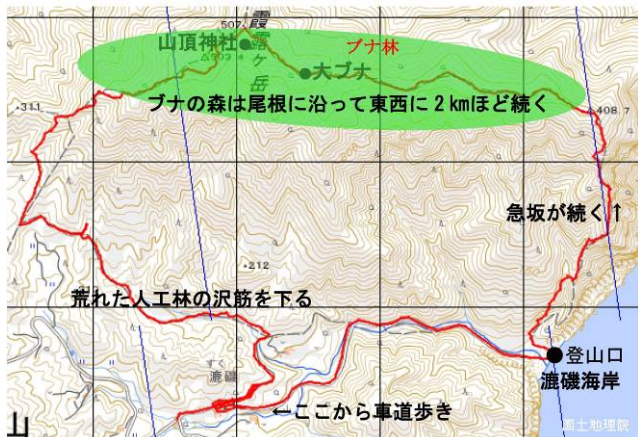


134) 霞露ヶ岳 507m

カロ（ウ）ガタケは、日本全国に分布する。福島では新地の鹿狼山、会津の神籠ヶ岳や家老岳、矢祭の佳老山などだが、岩手にも三山ある。意味が分からない山名だが、カロウとは急峻な場所・崖が崩れた箇所といった意味があるといわれる。霞露ヶ岳は、まさに船越半島で海岸線は太平洋に突出した岩壁に囲まれている。

この山の登山口は、瀧磯（すくいそ）海岸の海辺だ。まずは太平洋の海水に触れてから出発する。海拔ゼロ^〇から歩き始める山登りは、そんなに多くない。ここから標高409m点まで登りに汗を絞られる。時折、三陸海岸の展望を楽しみながら登る。409m点からは登り一辺倒から解放されると同時に、ブナの木が現れる。尾根の紅葉は見頃で、ウリハダカエダがピンク色を呈し、タカノツメの鮮やかな黄色に囲まれて、ブナの明るい茶色が調和とリズムを感じさせる。山頂近くでは、この尾根道唯一の太さを誇る大ブナがあった。北の地にあって200年以上生きる様は、圧倒的存在感だった。山頂からの下りでもブナ林は見られたが、西側には太いブナは少なかった。

コースタイム：登山口（1時間）主尾根（1時間20分）大倉山頂（2時間30分）登山口



山中に唯一見付けた大ブナは、周囲を圧倒する存在感だった

アマニュウ (*Angelica edulis* セリ科シシウド属)

吾妻・安達太良連峰のコナラ林からブナ林のやや湿り気のある林縁や草原に植生する高茎大型多年草。日本固有種。学名は食べられる (*edulis*) シシウドの意味で、食すると、葉柄が他のシシウド属に比べて苦味が少なく甘味を呈する。「ニュウ」はアイヌ語で食べられるの意味。吾妻・安達太良山麓にはオオハナウドやシシウドなどの同属の植物が植生するが、自生域の標高はオオハナウド、シシウド、アマニュウの順で高く、隔離されているように思う。なお、エゾニュウの自生はこの山域では確認されていない。

葉は互生。1、2回3出羽状複葉で、頂小葉はさらに3中裂する。葉形は広卵形から菱状広卵形で先は尖る。葉脈には白毛が着生する。葉縁は鋭鋸歯になる。葉色は、明るい緑色である。葉鞘の基部はふくらむ。茎はシシウドより細く紫色を帯びる。

花は頂生。分岐した枝の先に複散形花序を形成する。花序の基部の総苞片は付かないが、小花序の基部に細い小総苞片を数個付ける事がある。シシウドの花序は総苞片、小苞片とも有する。小花は花弁、雄しべとも5個で花弁の先端は尖り、内側に巻き込む。花色は白だが薄く桃色を呈する個体もある。雄しべの葯は白、花糸は透明感がある。雌しべは全体が透明感のある白で、小さい柱頭を突き出した下部が膨らんだ2個の花柱が合わさりクリの様な形をしている。

シシウドの仲間の花は大型で迫力を感じさせるものがほとんどだが、アマニュウは株全体が繊細な雰囲気漂わせる。そのためか、登山道で見かけても何気なく素通りしてしまいがちである。一旦、立ち止まってじっくり観察していると、放射状の赤紫の花柄の周辺に着いた小花群が花冠のようでその奥深い美しさにジワリと引き込まれていく。



ミヤマウツボグサ (*Prunella vulgaris subsp. asiatica var. aleutica* シソ科ウツボグサ属)

吾妻・安達太良連峰のクリ・コナラ林からブナ林の明るい林縁や草地に植生する多年草。ウツボグサの変種。ウツボグサより小型で走出枝を出さない。ハクサンウツボグサと併せてウツボグサの仲間は3種。ハクサンウツボグサはこの山域には自生していない。花言葉は「優しく癒す」だが、名前は花のイメージとはちよっと違うような気がする。

葉は対生。長楕円状披針形で葉柄があり、縁には浅い鋸歯がある。ウツボグサは鋸歯が無く全縁。ハクサンウツボグサは葉柄が無い。茎が四角いのはシソ科に共通。

花は頂性。直立した茎の先端に穂状花序を着生する。密に対生した苞葉の上に紫の唇弁花を着生する。1つの苞葉には3つの花が咲く。上唇はかぶと形で縁は全縁。下唇は3裂し、真ん中の裂片は鋸歯があり、大きく窪む。側裂片は長円形で下側に湾曲する。雄しべは4本、前側の2本は長く、上唇の中央表面下に斜上する。花糸の先は2つに分かれ一方の先端に2個のコイン状の葯室が縦に開く。雌しべは上唇中央で白い花柱が伸び、雄しべと同様に先端は2裂し、雄しべの上から尖った柱頭が突き出る。花糸、花柱とも紫色を帯びる個体もある。

基本種のウツボグサはカゴソウ(夏枯草)、セルフヒール(自然に治癒する)と呼ばれ、煎液が扁桃腺の炎症等の漢方薬として利用された。農村では昔からよく利用されたらしく、子供の頃、囲炉裏の上にウツボグサを入れた鉄瓶から独特の香りが漂っていたのが記憶に残っている。自然とは隔離された生活が続いた後に、社会人となり、始めた山歩きでウツボグサの花に出会い、品のある姿に惹かれた。それがあの鉄瓶の中身と同じものと知ったのはいつの頃だったか。

ウツボグサとミヤマウツボグサは葉の鋸歯の有無で区別されることを知り、撮影した写真で確認すると、確かに撮影した場所により滑らかな葉をもったものと鋸歯のあるものとに分かれていた。これからは葉も注意して観察したい。



第187回自然観察会案内：奥土湯自然林 早春の植物観察会

日時：2023年4月23日（日）8：00～15：30

集合場所 四季の里正面入り口駐車場（あづま橋側）

集合時間 8:00 参加定員 20名

内容 奥土湯のブナ・ミズナラ林を散策し、木々の芽吹きと林床に咲く、早春の花々を観察します。

準備するもの 昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、帽子、手袋（軍手複数）、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳

*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用：保険代(500円)、申し込み:4月21日(金)まで佐藤守(024-593-0188)へ電話またはメールにてお願いします(電話申込は午後7時～9時でお願いします)。

第188回自然観察会案内：母成峠新緑のブナ林観察会

日時：2023年6月4日（日）8：00～15：30

集合場所 四季の里正面入り口駐車場（あづま橋側）

集合時間 8:00 参加定員 20名

内容 母成峠から船明神に至る登山道を散策し、初夏の新緑と花々を観察します。

準備するもの 昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、帽子、手袋（軍手複数）、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳

*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用：保険代(500円)、申し込み:6月2日(金)まで佐藤守(024-593-0188)へ電話またはメールにてお願いします(電話申込は午後7時～9時でお願いします)。

西吾妻登山道誘導ロープ設置ボランティア(詳細は佐藤守まで)

ロープ設置作業の一般公募を継続します。公募は天元台側とデコ平側に分けて募集します。

1. 実施日：西大巔鞍部は平日、西吾妻小屋側は週末に実施します。

作業山域：西大巔鞍部

2023年6月13日(火)6時30分～16時00分(雨天時6月14日(水)に順延)

作業山域：天元台－西吾妻小屋(NF米沢と共同で実施します)

2022年6月17日(土)6時30分～16時00分(雨天時6月18日(日)に順延)

天元台湯本駅からのロープウェイ・リフト代(往復3800円)は自己負担になります

2. 定員：10名程度(山岳での行動において自己管理のできる方)

3. 内容：各山域の登山道誘導ロープの設置作業を行います。

4. 集合場所：四季の里交差点正面入り口駐車場6時30分または事前連絡により13日はグランデコススキー場駐車場8時00分、17日は天元台湯元駅7時30分

5. 申し込み：6月10日(土)まで佐藤守(024-593-0188)へ電話またはメールにてお願いします(電話申込は午後7時～9時でお願いします)。

ボランティア作業に係るロープウェイ・リフト代を支援していただける方を求めています。ご協力いただける方は下記に振込をお願いします(通信欄に「ボランティア資金」と記載をお願いします)

郵便振替：02170-0-24351「高山の原生林を守る会」へ

振込による会費の納入は、郵便振替02170-0-24351「高山の原生林を守る会」へ

「高山」高山の原生林を守る会会報 第124号 2023年3月発行

編集・発行：高山の原生林を守る会 HP:<http://www15.plala.or.jp/adumatakayama/index.htm>

代表連絡先：佐藤 守 Phone 024-593-0188(夜間7時～9時)

郵便振替：02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」

入会方法：年会費(1000円)を添えて上記まで

編集：佐藤・奥田